

Title	サン = ランベールの『四季』と『百科全書』 : 第二歌「夏」についての一考察
Sub Title	Les Saisons de Saint-Lambert et l'Encyclopédie : réflexions sur «l'Été»
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.57 (2013. 10) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20131031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サン＝ランベールの『四季』と『百科全書』

——第二歌「夏」についての一考察——

井 上 櫻 子

ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベール（1716–1803）の代表作『四季』（初版 1769）が、イギリスの詩人ジェームズ・トムソンの『四季』に着想を得た作品であるのは¹⁾、詩人自ら「序文」で公言していることもあり²⁾、当時の読者に広く知られた事実であった。そのため同時代の批評家の中には、サン＝ランベールをトムソンのエピゴーネンと酷評するものも現れた³⁾。たしかに、作者自身によって「春」「夏」「秋」「冬」の四つの歌に付せられた注記には、さまざまな自然の事物の描写がトムソンの『四季』に依拠していると明示されている。たとえば、春の訪れとともに楽しげに活動を始める鳥の描写⁴⁾、夏の日に照り輝く灼熱の太陽⁵⁾、秋の嵐の到来⁶⁾、冬山に生息する

-
- 1) この点については、以下の論考を参照されたい。Margaret Cameron, *L'Influence des Saisons de Thomson sur la poésie descriptive en France (1759–1810)*, Genève, Slatkine Reprints, 1975.
 - 2) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », Amsterdam, 1769, pp. xxvi-xxviii.
 - 3) たとえばフレロンは『四季』出版から数ヶ月後に、サン＝ランベールとトムソンの『四季』の詩句を細かく比較検討した上で、「トムソンの作品の方がより緊密性があり、より豊かで生き生きとしている」と結論づけている。Élie Fréron, *Année littéraire*, t. II, lettre I, 23 février 1770, p. 43, Genève, Slatkine Reprints, t. XVII, 1966, p. 107.
 - 4) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « le Printemps », 1769, p. 35 ; cf. Thomson, *The Seasons, edited with Introduction and Commentary by James Sambrook*, Oxford The Voltaire Foundation, 1981, « Spring », p. 6 et p. 10.

クマの生態⁷⁾など。そして、これ以外にもサン＝ランベール自身によって明らかにされていないものの、トムソンの自然の歌との関連性を見出せる詩句が決して少なくないのもまた事実である。とはいうものの、サン＝ランベールが20年の歳月をかけてあため続けたこの作品をより丁寧に読み進めると、それが作者の豊かな読書経験の上に成り立つことが次第に明らかになってくる。

本論考では、サン＝ランベールの『四季』第二歌「夏」に展開される人間の感受性、および農耕生活の美德に関する議論に注目しながら、彼がいかにして、イギリスの先達を範としつつも同時に乗り越えようとしていったかという問題についてひとつの回答を提示してみたい。

I. 第二歌「夏」に展開される感受性と快楽についての議論と『百科全書』

『四季』において自然の諸相を描くにあたり、サン＝ランベールがよりどころとしたのがコントラストの美学である。なぜなら、それが読者に心地よい驚きをあたえることができるからだというのである。

厳しい暑さを歌った後に、水辺や涼しく小暗い森を描いてみるがよい。読者はよろこんであなたに従い、あなたの描く木陰へと続くことだろう。読者はよろこんであなたとともに焼け付く太陽の炎と乾いた大地から逃れようとするだろう⁸⁾。

そして、「序文」におけるこのような主張に対応する一節が「夏」の歌にたしかに織り込まれているのである。

5) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1769, p. 83 ; cf. Thomson, *The Seasons*, « Summer », p. 60.

6) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Automne », 1769, p. 123 ; Thomson, *The Seasons*, « Autumn », p. 160.

7) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Hiver », 1769, p. 123 ; Thomson, *The Seasons*, « Winter », p. 216.

8) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », 1769, p. xvii.

休息する世界にひろがる熱気は
 遊戯、歌、労働すべてを中断させてしまった。
 すべては生気を失い、身をこがし、微動だにせず、日の光のみ
 自然の中でただひとつ、運動を続けている。
 おお、あの奥深い小道をさまようことはできないのか、
 山の高みから急流が走りだし、
 岩々の間、薄暗い草木の間をぬって
 小暗い谷へと流れ落ちていくのをみたあの小道を！
 (中略)

どれほどみたいか、あの水晶のように透明な波が
 落ちていくときに青い布を広げるように広がるのを⁹⁾。

『四季』「序文」において、サン = ランベールは自ら提唱するコントラストの美学をもっともよく反映しているのが、灼熱の太陽と山中を駆け抜ける急流の冷氣とを対比した一節だと述べている。しかし彼は自ら第二歌「夏」に付した注記の中で、この自然界のコントラストを歌い上げた一節が彼の独創ではないことを明かしている。ここでサン = ランベールが挙げている名が、まさしくトムソンなのである。まず、引用の最後の二詩行「どれほどみたいか、あの水晶のように透明な波が *Que j'aimerais à voir ces flots d'un cristal pur / 落ちていくときに青い布を広げるように広がるのを Étendre dans leur chute une nappe d'azur*」は、トムソンの「最初は、青いシートが落ちるように *At first an azure sheet as prone it falls*」という一節にインスピレーションを得たとしている¹⁰⁾。さらに、先に引用した一節の直前では、太陽がその威力を発揮する夏には、夜はまたたく間に過ぎ去ると語られているのだが、これもまたイギリスの先達を範として編まれた一節とされる¹¹⁾。作者自

9) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », 1769, v. p. 54.

10) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », p. 83 ; Thomson, *The Seasons*, « Summer », p. 88.

11) « v. 219. Son empire est douteux, son règne est d'un moment.

身によるこのような注記を無邪気に信じるならば、サン＝ランベールはトムソンから自然描写の美学を学んだと考えたくなるだろう。実際、自然描写の美学は、トムソンの『四季』をもってフランスに移入されたものであるとは、18世紀後半におけるフランス詩学の変遷が問題にされる際、よく指摘されることである。しかし、先の一節に織り込まれた涼気を求める人間の姿に注目すると、サン＝ランベールは酷暑の大地における人間の情緒的経験を語るにあたり、『百科全書』の一項目を参照していることが明らかになってくる。

涼しさ « *Fraîcheur s. f. (gram.)* » この語はわれわれが涼しいと感じる肉体的感覚そのものについて、涼しいという感覚を覚える場所について、あるいはその感覚を抱かせる原因について用いられる。一年のうちで酷暑の時期に求められるもの、木陰や水辺で、灼熱の太陽からのがれ、そっと揺り動かされる空気のかすかな作用を受けた時、森の奥、獣の住む洞穴、そして洞窟の中で心地よく感じられるもの、それこそが、涼しさなのだ¹²⁾。

照りつける太陽のもと、涼やかな小道、水晶のように透明な水の流れを恋いこがれるさまを歌ったサン＝ランベールの詩句は、明らかにデイドロの筆に成る『百科全書』の項目「涼しさ」を下敷きにしたものと言えよう。さらに、デイドロはこの一節の後、田園詩の権威、ウェルギリウスの『牧歌』から涼やかな泉と穏やかな草原、そして森の広がる幸せの地を歌った詩句を引き合いにし、「なんと見事な描写なのだろう！」と深い称賛の念を表明している¹³⁾。こうした言及もまた、サン＝ランベールがデイドロの項目をもとに、夏の野に認められるコントラストの美学を韻律にのせて歌おうと意を決する際の大きな要因になったと考えられる。

Short is doubtful empire of the night.

Thomson » ; *Ibid.*

12) Diderot, l'article « *Fraîcheur* », dans l'*Encyclopédie*, t. VII, p. 274.

13) *Ibid.*

サン＝ランベールが夏の野における快樂についての議論を展開する際、デイドロを参照しているのは、厳しい暑さと涼やかさのコントラストに関する一節にかぎったことではない。夏の野で楽しむ心地よい休息についての注記¹⁴⁾もまた、デイドロが担当した『百科全書』の項目に着想を得たものと考えられるのである。

暑さは快樂と同じように神経と筋肉をゆるやかに弛緩させ、精神に心地よい状態、充足感を感じさせようとし、そして精神はそれを感じ取り、納得する。その時にこそ、ただ存在するだけで幸福となり、次のように言うことができるだろう。「私は幸せだ。なぜなら存在するからだ」¹⁵⁾

夏の日に木陰、あるいは水辺の草の上で覚える心地よい休息、その「心地よさ」の源には、ただ自分が存在するだけで満たされているという感情、すなわち「自己充足感」があるのみである。デイドロの読者であれば、「夏」の注記に認められるこの一節が、『百科全書』の項目「甘美さ」に示される「甘美な休息」の定義ときわめて似通っていることに容易に気づくだろう。というのも、この項目で、デイドロは人が心地よい休息を味わっている時、「幸せであるという感情が薄れていくのは、存在しているという感情が弱まるのと同時代」¹⁶⁾と述べ、幸福感と自己存在感が表裏一体をなしていることを強調しているからである¹⁷⁾。さらに、ここで「夏」の注記にみられる次の一節に注目してみたい。「暑さは快樂と同じように神経と筋肉をゆるやかに弛緩させ、精神に心地よい状態、充足感を感じさせようとし、そして精神はそれを感じ取り、納得する。」サン＝ランベールのこの記述に従えば、心地

14) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1769, pp. 78–81.

15) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1769, pp. 80–81.

16) Diderot, l'article « Délicieux », dans *l'Encyclopédie*, t. IV, p. 783.

17) この項目に関しては、おもに以下の文献を参考にした。Marie Leca-Tsiomis, *Écrire l'Encyclopédie. Diderot, de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, SVEC, n° 375, 1999.

よさ、充足感という精神が感じ取る感情は、神経や筋肉、すなわち肉体的感覚に支配されているということになる。この点において詩人はデイドロの提唱する感覚論的人間論を支持していることも明らかになる。

『百科全書』の項目「涼しさ」や「甘美さ」には、デイドロの散文が備える「詩的」な美しさがよく表れているとされる。これらの項目をもとにしたサン＝ランベールの詩句は、デイドロの文体に対する評価がかならずしも印象主義的なものではないことを示すと同時に、フランス詩学の変遷期にあった18世紀後半における韻文と散文の関係という問題について再検討を迫るものだと言えるだろう。

II. 「倦怠」について

『四季』第二歌「夏」において『百科全書』に展開される人間論の影響が見られるのは、快樂に関する議論にとどまらない。「快樂」と対をなす「苦痛」に関する詩人の思索に視点を移してみたい。

平穏な田園生活の美德を賛美した後、サン＝ランベールは「彼（農民）は、今日愛するものを明日も愛する。／そしてその心は決して倦怠することはないのだ」と述べ、「倦怠 l'ennui」¹⁸⁾とはどのような感情なのか、自ら注を付して解説している。

人間がもはや発明する必要もなければ、走る必要もなく、頭脳活動する必要もなければ運動する必要もないような状況がある。思うに、そのような状況においてこそ、人は「倦怠」を覚えるのだ。倦怠が健康、および幸福に与える影響は恐るべきである。これに対する治療薬として人が求めるのは、散歩すること、珍しいものを目にする、芸術を楽しむこと、遊戯、社交界における遊興にふけることである。そのほかの倦怠もある。それは、情熱が消えたときに続く無気力状態、鮮烈な味が感じられなくなったときに続く無気力状態である。このような「倦怠」は治療

18) ちなみに「倦怠 l'ennui」とは、18世紀以前のフランス語では、苦痛をともなうものというニュアンスがあった。

不可能である。田園に住む人は、その境遇、財産、生活習慣などにより、このようなつらい精神状態から免れている¹⁹⁾。

ここでサン＝ランベールは、人間は完全な無気力状態を苦痛と感ずること、それゆえ、つねに何らかの肉体的活動、あるいは精神活動をおこなう必要があることを強調している。そして、『四季』の初版では、人間が完全に活動をした状態で覚える感情とは「不安 *uneasiness*」にほかならないとし、ロックの名を引き合いにしている²⁰⁾——1771年に出版された第三版以降²¹⁾、英語の *uneasiness* という語とイギリスの哲学者の名は削除されてしまうが——。しかしこの「夏」の注記と、『百科全書』の項目「倦怠」をつきあわせると、サン＝ランベールはロックの定義以上に、『百科全書』の解説によりそいながら議論を展開していることが明らかになる。ロックにとって、「精神の不安」とは「欲望」と同義であり、それは「何らかの幸せの欠如から生じる」とされている²²⁾。つまり、この議論によると、人間の目的は充足感を得ることにあり、それを達成するために行動を起こそうとする意志につながるのが精神の不安だということである。つまり、ここで問題になっているのは、人間が行動を起こすときの原動力となる「意志」である。これに対して、サン＝ランベールは、「倦怠」とは、「人間がもはや発明する必要もなければ、走る必要もなく、頭脳活動する必要もなければ運動する必要もないような状況」、つまり肉体的活動ないし精神的活動が完全に停止した無気力状

19) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1769, p. 82.

20) ロックによる「不安」の定義は『人間悟性論』に展開されている。Essai philosophique concernant l'entendement humain, traduit par M. Coste, 1755 (édité par Émilienne Naert, Paris, J. Vrin, 1998), livre II, chap. 21, p. 194.

21) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Amsterdam, 1771. サン＝ランベールは、『四季』初版出版後も、20年あまりの推敲の産物であるこの自然の歌に加筆、修正をほどこし続けた。とくにこの第三版には、大幅な改変が加えられている。

22) Locke, *Essai philosophique concernant l'entendement humain*, traduit par M. Coste, 1755 (édité par Émilienne Naert, Paris, J. Vrin, 1998), livre II, chap. 21, p. 194.

態から生じる苦痛だとしている。言い換えれば、サン＝ランベールにとって重要なのは、まず身体器官ないし精神がたえず刺激を受けているということである。なぜならそのような刺激こそ、生きているという充足感を感じさせるものだからだ。この点において、サン＝ランベールの「倦怠」に対する考え方は、『百科全書』への最も重要な寄稿者、ジョクールのそれときわめて近いと言えるのである。

肉体同様、精神にも欲求がある。そしてその欲求のうちもっとも重要なものが、何かに没頭していたいというものである。それには2つの方法がある。1つは外界の事物が精神に与える印象に身を委ねること、これは「感じる」と呼ばれる。もう1つは有用なもの、興味深いもの、心地よいものについて思いをめぐらすことで、これは「思索する」「冥想する」と呼ばれる²³⁾。

『百科全書』の項目においても、人が「倦怠」から逃れるのには、肉体、および精神が刺激されて、活性化されることが重要とされている。ジョクールが項目「倦怠」を手がけるにあたり、彼の同時代のフランスの思想家——とりわけデイドロをはじめとする百科全書派の思想家——と同様、ロックの『人間悟性論』の影響を少なからず受けたことは確かであろう。しかし、ジョクールの手に渡った時、人間の「意志」に焦点を当てたロックの議論は、むしろ人間の精神、および肉体が受ける刺激そのものに注目する議論へと変容していったと考えられる。そして、サン＝ランベールは、ロックの議論そのものというよりもむしろ、彼の哲学のフランスにおける受容のあり方に影響を受けていると言えるだろう。

さてここでなぜサン＝ランベールが「倦怠」についての議論を持ち出してきたのかという問題にたちかえてみよう。それは、農民は平穏な生活を送りつつも、苦痛をとまなう「倦怠」から免れているとして、素朴な田園生活

23) Jaucourt, l'article « Ennui », dans l'*Encyclopédie*, t. V, p. 693.

の美德を高らかに歌い上げようとしたからにはほかならない。そして、農耕生活を賛美する一節にも、同時代のフランス思想界における関心事との連続性が認められるのである。

Ⅲ. 田園生活の賛美と『百科全書』の項目「農業」

「夏」の歌では、野の植物を力強く生育させる太陽への讃歌に続いて、あたかも黄金色の大海原が広がるかのように麦の穂が豊かに実る畑の様子が描かれる²⁴⁾。そして、周囲の山や森と見事な調和をなす肥沃な農地の光景は、それを見る者の心に「高貴で純粋な喜び、心の平静と幸せ」²⁵⁾をもたらしてくれると歌われた後に、農業という技芸を称える一節が加えられるのである。

神聖なる農業よ、私は汝の恩恵を称えた。

汝は自然の恩恵をより豊かにすることができる。

諸要素に強いて、自然を充実させることができるのは汝のみ。

自然がこのうえなく美しく飾られるのは、汝のおかげなのだ²⁶⁾。

この一節に付せられた注記において、サン＝ランベールはなぜここで農業を称賛する詩句を差し挟んでいるのか、明らかにしている。

健全な理性が農業の利点について指摘しうるあらゆることが語られ尽くして久しい。そして、今日では農業の利点について語られる機会があまりにも多すぎる。真実の一部が論証されている以上、もはや残されているのは、それを感じ取らせることだけだ。そして、それは想像力の生み出す作品がなすことなのだ²⁷⁾。

24) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », 1769, pp. 47–49.

25) *Ibid.*, p. 48. ただし、「高貴で純粋な喜び un plaisir noble et pur」は、1773年刊行の第5版以降、「考えに考え抜かれた喜び un plaisir réfléchi」という表現に置き換えられている。

26) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », 1769, p. 49.

27) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1769, p. 81.

「農業の利点について語られる機会があまりにも多い」という一節は、18世紀後半のフランスで重農思想が興隆し、急速に広まったさまを指していると考えられる。農耕生活の賛美の中で、ここでサン＝ランベールが念頭に置いていたと思われるのが、ディドロが『百科全書』に寄稿した項目「農業」である。

「農業«L'Agriculture»」とは、その語からも十分明らかなように²⁸⁾、土地を耕す技芸である。この技芸は、諸技芸のうちで第一のもの、最も有用で、最も広く世に広まっており、おそらくは最も重要なものである。(中略) 何世紀もの間、古代ローマ人のなかで最も高名な人々は、野を離れて共和国の第一の務めに就いたのであり、また、それよりも注目値するのは、共和国の第一の務めから農作業へと立ち戻ったことだ。これは怠惰のせいなどではない。また、権威を嫌い、公務から遠ざかろうとしているためでもない。国家が必ず備えるべきもののなかには、祖国を守る者となるべく常に備えているわれらが偉大な農夫たちも数えられているからだ²⁹⁾。

ここで「共和国の第一の務め」とあるのは、兵役のことである。数ある農業擁護の文献の中で、詩人が『百科全書』のこの項目を念頭に置いていたに違いないとみなすその根拠は、「夏」の歌の中盤に置かれた一つのエピソードに求められる。というのも、ここで詩人は、貴族の出で長らく軍人として国王に仕えた老人が、農作業ほど大きな喜びをもたらすものはないこと、そして平穏な農耕生活を営むことが、軍務に就くのと同様に祖国への貢献になることに気づく様子を描いているからだ³⁰⁾。先の「夏」の注記において主張しているとおり、サン＝ランベールは、同時代の知識人がさかんに称揚した重

28) 「農業l'Agriculture」という語が、ラテン語の「土地 agri」と「耕す cultura」から成る語であることを指している。

29) Diderot, l'article «Agriculture», dans l'*Encyclopédie*, t. I, p. 183.

30) Saint-Lambert, *Les Saisons*, «L'Été», 1769, pp. 57–60.

農主義の思想を、「想像力の生み出す作品」、すなわち詩的言語をとおして読者に伝えようとしているのである³¹⁾。

18世紀なかば、自然の事物の描写という新たな詩作のテーマがフランスに紹介された際、作家、批評家の間では、最も高貴な表現手段である韻文が卑近な田園生活の詳細を扱うことの可否をめぐる議論が展開された³²⁾。サン＝ランベールも、「(彼によれば) 前例のない」自らの試みに否定的な立場をとる読者の存在を意識していたことが、『四季』「序文」冒頭の段落にはっきりと表れている³³⁾。当時フランスで興隆した農業擁護の思想は、田園詩を手がけようとする詩人にとって、まさに好都合な議論と映ったであろう。そして、そのような思想の影響を受けることによって、サン＝ランベールの自然の歌は、トムソンの自然の歌と性格を異とする作品として完成されたとも言える。なぜなら、スコットランド哲学、とりわけシャフツベリの影響のもとにあるトムソンが、自然の観想はこの美しい秩序を生み出した神の観想へと至るものと捉えられていたのに対し³⁴⁾、サン＝ランベールは、むしろ『百科全書』に展開される感性論や技芸に対する議論を踏まえながら、人間がこの世でより充足感をもって生きる術を模索しているからである。

31) 実際、サン＝ランベールの『四季』は同時代の重農主義者たちによって、高く評価された。以下の定期刊行物を参照されたい。*Éphémérides du citoyen ou bibliothèque raisonnée des sciences morales et politiques*, Paris, Lacombe, 1765–1772, 34 vol.

32) たとえば、ヴォルテールやデ・フォンテーヌ師などは、保守的な立場を取り、自然の事物の描写を目的とした詩に批判的な見解を提示している。以下の文献を参照されたい。*Discours de M. de Voltaire à sa Réception à l'Académie française*, dans *Œuvres complètes*, éd. Moland, Paris, Garnier Frères, t. XXIII, 1879, pp. 207–210 ; Les opinions de l'abbé Desfontaines sont résumées par Rosset dans le « Discours sur la poésie géorgique » : *L'Agriculture*, Paris, Imprimerie royale, 1774, pp. xi-xiv.

33) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », 1769, p. v.

34) Thomson, *The Seasons*, « Introduction », par James Sambrook, pp. xviii-xx.

万物が再生する野の喜びを語った第一歌「春」には、ウェルギリウス、テオクリトス、ルクレティクスからトムソンに至るまで、自然の事物ないし田園生活を歌う詩人たちの影響を受けた詩句が少なからず認められ、サン＝ランベールの『四季』が西洋の田園詩の系譜の上に成り立つ作品であるかのような印象を受ける。その一方で、第二歌「夏」には、トムソンの詩句に着想を得ながらも、感受性や農耕生活の美徳に関するより深い議論に関しては、『百科全書』の項目との連続性を示す詩句や注釈が確認される。そればかりか、この第二歌にはサン＝ランベール自身『百科全書』に寄稿した項目「方法」「立法者」をそのまま写し取った注記も見受けられ³⁵⁾、『四季』がもはや単なる伝統的な田園詩の枠組みにとどまる作品ではなく、むしろ当時のフランス思想界における最新の議論を取り込もうという作者の強い野心のもとに制作されたものであることが感じ取られる。実際、続く「秋」や「冬」の歌にも、感性論についてはメランコリー、技芸については狩猟や演劇の楽しみ³⁶⁾など、表面的にはトムソンと共通する主題を扱いつつも、実際にはデイドロを中心とした百科全書派の支持する主張に肩入れするような形で議論が展開されているのが確認される。サン＝ランベールによるこのような変奏のプロセスは、『百科全書』という書物が、イギリスの編集者チェンバーズによる『サイクロペーディア』英訳企画を出発点としながらも、さまざまな事典や文献を典拠とし、最終的にはフランスの最新の学知を盛り込んだ本文17巻、図版11巻からなる巨大な事典として完成されたことを思い起こさせる。百科全書派の中におけるサン＝ランベールの位置づけについては、いま

35) この問題については、以下の拙論で考察した。「『百科全書』の読者にして寄稿者、ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベール—『四季』第二歌「夏」の注釈をめぐる」『藝文研究』第103号、2012年12月、pp. 133–148 (115)–(130)。

36) 『四季』に展開される演劇論と『百科全書』の関係については、以下の拙稿で検討した。「Saint-Lambert contre Rousseau—la fonction des réflexions sur le théâtre dans *Les Saisons* », dans *Études de langue et littérature françaises* (Société japonaise de langue et de littérature françaises), n° 88, mars 2006, pp. 27–42.

だにまとまった研究は存在しない³⁷⁾。しかし、『四季』第四歌「冬」³⁸⁾の注記において、詩人は百科全書派の試みに惜しめない賛辞を贈り、自ら与する思想的陣営を明らかにしている。サン＝ランベールの『四季』に見受けられる「主題と変奏」のプロセスに目を向ける時、『百科全書』の多くの項目に見られる典拠の書き換え作業の意味についてもまた新たな視点でとらえなおすことが可能になるかもしれない。

付記：本研究は、平成25年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)（課題番号23720180）の助成を受けたものである。

37) 『百科全書』への寄稿者に関する情報としては、以下の文献が最も網羅的と考えられる Frank A. Kafker et Serena L. Kafker, *The Encyclopedists as individuals : a biographical dictionary of the authors of the Encyclopédie*, SVEC n° 257, 1988.

サン＝ランベールと『百科全書』との関連については、以下の論考において最も詳細に論じられている。François Moureau, « Le manuscrit de l'article ou l'atelier de Saint-Lambert », *Recherches sur Diderot et l'Encyclopédie*, n° 1, 1986, pp. 71–84.

38) Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Hiver », 1769, p. 179.